Osaka University Knowledge Archive

Title	消化性潰瘍におけるセクレチン分泌動態ー十二指腸内胃酸負荷試験による検討ー
Author(s)	黒川, 正典
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33501
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【40】

氏名・(本籍)	黒川正典（くろかわ まさのり）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 5805 号
学位授与の日付	昭和57年10月6日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**消化性潰瘍におけるセクレチン分泌動態** **ー十二指腸内胃酸負荷試験による検討ー**
論文審査委員	(主査) 教授 木谷 照夫 (副査) 教授 垂井清一郎　教授 宮井 潔

論文内容の要旨

〔目　的〕

消化性潰瘍におけるセクレチンの病態生理学的意義を明らかにするため，十二指腸内酸性化によるセクレチン分泌反応の検討が諸家により数多くなされてきたが，未だ一定の結論は得られていない。十二指腸内酸性化の方法としては十二指腸への塩酸注入法が一般的である。本研究は，それらの方法とは異なり，より生理的な方法と考えられる，テトラガストリン刺激により分泌された被験者自身の胃酸による十二指腸内酸負荷試験（内因性酸負荷試験）を考案し，消化性潰瘍患者における胃酸に対するセクレチン分泌反応について検討したものである。

〔方　法〕

1．対　象

十二指腸潰瘍10例，胃潰瘍9例および若年健常者ボランティア5例を対象とした。

2．胃酸分泌能の測定

テトラガストリン4 μg/kg筋注刺激による胃液検査を行った。健常者群のみ，胃液検査時セクレチン測定用に経時的採血を行った。

3．内因性酸負荷試験

早朝空腹時，右側臥位にて30分間横臥した後，テトラガストリン4 μg/kg筋注刺激を行い右側臥位にて胃液の十二指腸への流出を促し，刺激後90分間血中セクレチン反応をみた。

4．外因性酸負荷試験

健常者群のみ，十二指腸ゾンデによる1/10M塩酸の十二指腸下行脚への直接注入試験を行い，

血中セクレチン反応をみた。

5．血中セクレチンの測定

血漿セクレチンの測定はセクレチンキット「第一」を用い radioimmunoassay 法にて行った。

〔成　　績〕

1．内・外因性酸負荷試験における血中セクレチン反応の比較

健常者に対する内因性酸負荷試験では，刺激後30分より漸増し，60分，90分で有意の上昇であった。外因性酸負荷試験では，塩酸注入中有意の上昇を示し，中止後速やかに前値に復した。両負荷試験における単位酸量当りのセクレチン分泌量には有意の相関関係がみられた。

2．テトラガストリン自体のセクレチン分泌におよぼす影響

テトラガストリン刺激後，胃液を吸引すると血中セクレチンの変化はほとんどみられなかった。

3．内因性酸負荷試験による血中セクレチン反応とテトラガストリン刺激による胃酸分泌反応の関連性

十二指腸潰瘍群，胃潰瘍群ともに，血中セクレチン値は刺激後直ちに上昇を示し，30分で頂値となり，以後ほぼ一定であった。また，そのセクレチン反応曲線はテトラガストリン刺激による胃酸分泌反応曲線にほぼ平行していた。セクレチン分泌量と負荷されたと推定される酸量との間には，両潰瘍群ともに有意の相関がみられた。

4．疾患別セクレチン分泌量の比較

セクレチン分泌量を表わす指標としての最大セクレチン増加量（peak ΔIRS）および総セクレチン増加量（$\Sigma\Delta$IRS）は，三群間に有意の差はみられなかった。負荷されたと推定される酸分泌増加量（ΔAO）は，十二指腸潰瘍群が最も高値を示し，胃潰瘍群は健常者群よりもやや低値を示した。よって，単位負荷酸量当りのセクレチン分泌増加量（$\Sigma\Delta$IRS/ΔAO）をみると，十二指腸潰瘍群が他の群に比し有意に低値を示した。胃潰瘍群は健常者群との間に有意の差はみられなかった。

〔総　　括〕

1．テトラガストリン刺激による内因性酸負荷試験により，血中セクレチンの明らかな上昇を認めた。

2．本法による血中セクレチンの上昇は，テトラガストリンの直接作用ではなく，テトラガストリン刺激により分泌された胃酸の十二指腸への流出により惹起されたものと考えられた。

3．本法におけるセクレチン分泌量は，外因性酸負荷試験におけるセクレチン分泌量によく相関し，本法の有用性が強く示唆された。

4．十二指腸潰瘍群では，胃酸に対する相対的なセクレチン分泌量の低下がみられた。

5．胃潰瘍群では，胃酸に対する血中セクレチン反応において血中増加がやや早期にみられるが，セクレチン分泌量に関しては健常者群との間に差はみられなかった。

6．十二指腸潰瘍において胃酸に対するセクレチン分泌反応の低下がみいだされたことは，その病因ないし病態に果たすセクレチンの重要性を示唆している。

論文の審査結果の要旨

セクレチン分泌能の検索には，従来までは十二指腸への直接塩酸注入法が用いられてきた。本論文は，テトラガストリン刺激により分泌された被験者自身の胃酸による十二指腸内胃酸負荷を行うという，より生理的な方法を考案し，これにより十二指腸潰瘍例において胃酸に対するセクレチン分泌反応の低下がみられることを明らかにしたものである。十二指腸潰瘍の病態生理の解明にとって重要な知見を提供した有意義な研究と考えられる。